



# かんすい

日本水環境学会関西支部ニューズレター

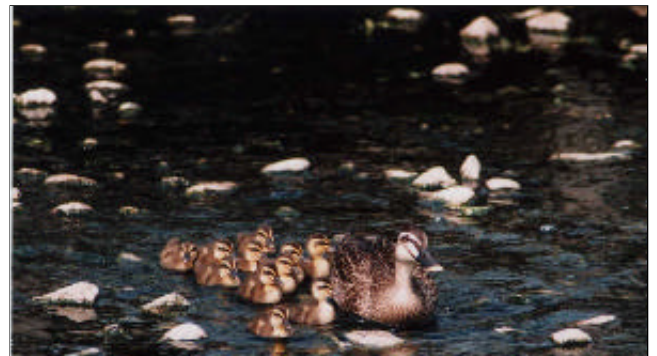
No. 1 (1998年9月21日発行)

— 編集・発行 —  
日本水環境学会関西支部編集委員会  
— 連絡先 —  
兵庫県神戸市灘区竹平町3-1-27  
兵庫県立公営職業訓練所 古武庫館5F  
Tel:078-738-8811・Fax:078-738-7817

## 下水処理場の屋上公園で元気に育つ カルガモたち

寝屋川南部広域下水道組合では、処理水を使った人工池の周辺に見学者用の囲いを作ったり、専門家に好物のエサ指導を受けるなど、カルガモの保護に努力しています。

場所 東大阪市川俣2-1-1  
川俣処理場スカイランド「水辺の広場」



## 関西支部 News Letter の創刊に向けて 奥野 年秀

社団法人日本水質汚濁研究協会（1981年9月発足）が1991年6月に社団法人日本水環境学会に改称されました。支部活動の歴史では、1984年7月に関東支部および11月に西部支部が設立され、1988年1月の東北支部や同年12月の中部支部設立と続いた。1989年には西部支部から九州支部、中国・四国支部および関西支部が分化し、1990年8月には北海道支部が設立されました（当学会会員名簿1997年版参照）。

西部支部や現在の関西支部では、過去15年間に多くの先達が水環境に関する研究活動を行っています。例えば、1984年からのGC/MS技術研究討論会（1984年～、現在の本部研究委員会）や環境文化部会（1986年～）や地下水汚染防止対策研究会（1991年～、現在は独立）などです。最近では、1996年から関西支部研究発表会（年1回）が実施されています。しかし、関西支部に所属する会員相互の情報交換として、会員が自由に意見や日頃の思惑を述べるフォーラムとしての小冊子が必要です。インターネットによる迅速な情報交換の時代に逆行する試みと思われそうですが、個々人のインターネット情報とは異なる次元の"水環境"と言う総合的な現象を多角的に論じる場があれば便利です。現代社会では、行動を起こしてもレスポンスやインパクトが見えてこないファジー現象を感じます。関西支部では、ここにNews Letterを創刊して、会員諸氏共通の場をつくりました。多くの方々の積極的な投稿を望む次第です。

（おくのとしひで、日本水環境学会関西支部 支部長）

# 1998年度完関西支部事業案内

古 武 家 善 成

## 1) 「琵琶湖・淀川の水環境」市民学術講演会（ 9月28日（月） 13:30~17:30 立命館大学理工学部ブリズムホール）

今年度の支部第一の事業は、9月の本部シンポジウムと時期を合わせて立命館大学びわこ・くさつキャンパスで行う市民学術講演会（科研費補助事業）です。これは、昨年度に神戸で行った「阪神・淡路大震災と水環境」に関するシンポジウムに続く、支部主催の市民向け講演会の第2弾です。講演会のメインタイトルは「琵琶湖・淀川水系における水環境の現状と将来展望 - 琵琶湖と淀川をとりまく問題の現状と対策を探る - 」で、下記に示すように、各分野の5名の専門家に琵琶湖・淀川水系の水環境問題について講演していただきます。市民向けの講演会ですが、環境ホルモンを含む化学物質による汚染問題で新たな脚光を浴びる琵琶湖・淀川の水環境について、これを考え直す機会としてふるってご参加ください（入場無料）。

講演：琵琶湖流域の自然生態系 坂本 充（滋賀県立大・環境科学）

琵琶湖の水環境 - パラダイムの変換に向けて - 熊谷道夫（琵琶湖研）

琵琶湖における化学物質の生態影響 松井三郎（京大・工・環制研センター）

淀川水系における化学物質の動態 奥村為男（大阪府公害監視センター）

流域の水環境管理 山田 淳（立命館大・理工）

## 2) 「処理場屋上公園・地下河川」見学会（10月下旬予定）

寝屋川南部の川俣下水処理場・屋上公園と寝屋川南部地下河川への、今年度第1回の見学会です。雨水貯留を兼ねた地下河川の建設は東京で有名ですが、大阪でも大規模な地下河川が建設中です。市民とのふれあいを打ち出した下水処理場屋上公園と、地下数10mの所でシールド工法を駆使して掘り進められている地下河川は、一見の価値があります。

## 3) 「リモートセンシング」講演会および総会・特別講演会（11月上旬予定）

講演会の方は、例年行っている会員向け講演会の第1回目で、「衛星リモートセンシングの水環境研究・監視への応用」をテーマとします。近年、解像度が1m以下にまで高精度化した衛星画像データの、水環境研究への幅広い応用が待たれています。講演会では、整備が進みつつあるGIS分野との連携の現状も含め、専門家や衛星データ取り扱い業者から豊富な応用例が示されます。今年度は、本部シンポジウムが関西支部内で行われるために、一昨年度から開催している支部研究発表会を実施しませんので、総会・特別講演会をこの講演会に合わせて行います。そこで、特別講演にも、国立環境研究所でリモートセンシングを長く研究された現東大の安岡善文氏を予定しています。リモセン技術入門により機会です。

## 4) その他の講演会・見学会

8月5日には大気環境学会近畿支部、環境文化フォーラムとの共催で環境文化講演会を行いましたが、秋以降、「『川と人との関わり』を考える」フォーラムディスカッションや奈良県桜井浄水場・檀原考古学研究所への見学会を予定しています。多くの皆さんの参加を期待します。

## 5) その他の支部活動

関西支部では、会員による研究部会活動を支援していますが、今年度から、環境文化部会に加え、川部会、環境ホルモン部会が発足しました。会員の幅広い参加をお願いします。各部会の連絡先は以下のとおりです。

環境文化 部会： 福永 勲（大阪市立環科研；Tel. 06-771-3374, Fax. -772-0676）

川 部会： 土永恒弥（大阪市立環科研；Tel. 06-771-3251, Fax. -772-0676）

環境ホルモン 部会： 中室克彦（摂南大・薬；Tel. 0720-66-3122, Fax. -66-3123）

古武家善成（兵庫県立公害研；Tel. 078-735-6911, Fax. -735-7817）

本部出版物企画編集委員会の企画のもとに、各支部の責任編集による日本の水環境シリーズの出版（出版社：技報堂）準備が進んでいますが、関西支部でも、「日本の水環境 - 近畿編」の執筆が始まっています。来年度春以降にシリーズ発行されますのでご期待ください。

幹事会を2ヶ月に1回、理事会を年1回（3月）行い、支部活性化に勤めています。

# 日本水環境学会関西支部のあゆみ

<p>1984.11.12 (社)日本水質汚濁研究協会西部支部設立</p> <p>設立記念講演 中西 弘「瀬戸内海の環境保全について」、中川文一「琵琶湖の水質汚染について」</p> <p>年間主要行事 講演会「陸水動態について」、「処理技術、水質測定・海水動態について」</p> <p>1985.11.18 第2期総会</p> <p>総会記念講演 佐谷戸安好「人の健康と水質評価」、矢野 洋「タイ国の水事情について」</p> <p>年間主要行事 講演会「陸水動態・海水動態について」</p>	<p>支部長 渡辺 弘</p> <p>副支部長 井上頼輝</p> <p>幹事長 北村弘行</p>
<p>1986.11.28 第3期総会</p> <p>総会記念講演 砂原広志「自動計測について」、手塚泰彦「富栄養化について」</p> <p>年間主要行事 講演会「湖沼水質改善策」、シンポジウム「赤潮」、「伊勢湾・三河湾」、「湖沼水質の動態」</p> <p>1987.11.27 第4期総会</p> <p>年間主要行事 環境文化会講演会、シンポジウム「有害化学物質の毒性試験とモニタリング」</p>	<p>支部長 井上頼輝</p> <p>副支部長 宇野源太</p> <p>幹事長 森澤真輔</p>
<p>1988.11.25 第5期総会</p> <p>総会記念講演 渡辺 弘「環境生態系の調和と環境文化 大阪湾沿岸水質汚濁の歴史的回顧への序説」、和田安彦「都市の水管理 雨水管理を中心として」</p> <p>1988.12.2 中部支部分離設立。その後、順次中四国支部、九州支部が設立される。</p> <p>年間主要行事 講演会「低沸点有機塩素化合物による地下水汚染」、「酸性雨による環境問題」</p> <p>見学会「関西新空港建設現場と関連施設」、学会本部年会(於:立命館大学)</p> <p>1989.11.24 第6期総会・・・関西支部と名称変更される。</p> <p>総会記念講演 駒井 豊「土壌生態系に及ぼす重金属の影響」、藤田正憲「排水処理における微生物の馴養と育種」</p> <p>年間主要行事 環境文化部会講演会、講演会「農薬による水質汚濁について」、「浄水高度処理技術の動向」、「水質汚濁に係わる生活排水対策について」</p>	<p>支部長 宇野源太</p> <p>副支部長 寺島 泰</p> <p>幹事長 小田國雄、中本雅雄</p>
<p>1990.11.22 第7期総会</p> <p>総会記念講演 園 欣弥「産業廃水処理の変遷 生物処理プロセスの選択」、国松孝男「ゴルフ場汚染の現状」</p> <p>1991.3.本部総会にて水環境学会と改称。</p> <p>年間主要行事 環境文化講演会、国際学会(於:京都)、第1回地下水汚染とその防止対策に関する研究集会、講演会「水域環境における硝酸性窒素とその生態影響」、「都市の水辺環境整備の現状と将来」</p> <p>1991.11.29 第8期総会</p> <p>総会記念講演 手塚泰彦「琵琶湖における窒素・リンの挙動と富栄養化」、菅原正孝「自然型川づくりの動向と課題」</p> <p>年間主要行事 講演会「閉鎖性海域の汚染と対策」、講習会「水道水質規準改正と今後の展望」</p> <p>見学会「大阪産業廃棄物処理公社堺7 3区」</p> <p>1992.11.27 暫定期総会 期間を4月1日から変更</p> <p>総会記念講演 宇野源太「大阪市内河川にみる都市河川の環境科学」、日色和夫「窒素・リンの自動計測法」</p> <p>期間主要行事 講習会「膜分離法の水処理への応用」</p>	<p>支部長 寺島 泰</p> <p>副支部長 小田國雄</p> <p>幹事長 中室克彦</p>
<p>1993.11.26 第9期総会</p> <p>総会記念講演 松尾友矩「我国における水環境の変遷と今後の課題」、鈴木 繁「今日の水質規準改正の主旨と今後の動向」</p> <p>年間主要行事 環境文化講演会、見学会「湖南中部浄化センターの見学と琵琶湖水の観察」</p> <p>講習会「新しい水質規準と分析方法に関する講習会」、</p> <p>「オゾン・活性炭による最近の水処理技術の動向」、情報ネットワーク講演会</p> <p>1994.11.24 第10期総会(10周年記念総会)</p> <p>総会記念講演 中西 弘「海域のリン・窒素類型指定に関連する現象について」、中辻啓二「大阪湾の流動と拡散の特性について」</p> <p>年間主要行事 講演会「環境と人にやさしい洗剤を求めて」、情報ネットワーク講演会</p> <p>見学会「淀川保全水路となにわ放水路」、「関西新空港環境施設見学」、環境文化講演会、第3回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会</p>	<p>支部長 小田國雄</p> <p>副支部長 村岡浩彌</p> <p>幹事長 福永 勳</p>
<p>1995.11.29 第11期総会</p> <p>総会記念講演 浦野紘平「有害化学物質管理の在り方」、飯島 孝「総量規制制度に関する行政の対応」</p> <p>年間主要行事 記念出版「地下水・土壌汚染の現状と対策」、環境文化講演会</p> <p>講習会「多自然型川づくりを考える」、見学会「農村集落廃水処理施設の見学」</p> <p>第30回本部年会にて特別研究委員会「阪神・淡路大震災による水環境への影響と対策」シンポジウム開催</p> <p>1996.11.29 第12期総会・第1回研究発表会</p> <p>総会特別講演 末石富太郎「水環境研究のスポンサーは誰か」、特別セッション「関西の水利用を考える」</p> <p>年間主要行事 情報ネットワーク講演会、環境文化講演会、講習会「Rec Assay講習会」、「生物の多様性」</p> <p>見学会「淀川の水環境について」、「廃棄物焼却施設見学会」</p> <p>第31回本部年会にて特別研究委員会「阪神・淡路大震災による水環境への影響と対策」シンポジウム開催</p>	<p>支部長 村岡浩彌</p> <p>副支部長 奥野年秀</p> <p>幹事長 古川憲治、石井義裕</p>
<p>1997.11.14 第13期総会・第2回研究発表会</p> <p>総会特別講演 宮田秀明「ダイオキシン類の法的規制と汚染評価」、脇本忠明「ダイオキシン類による環境汚染の現状」</p> <p>年間主要行事 情報ネットワーク講演会、環境文化研究会、討論会「地域開発と生物の保護」</p> <p>見学会「琵琶湖博物館・BiYo見学会」、「和歌川終末処理場・万葉館見学会」</p> <p>シンポジウム「阪神・淡路大震災による水環境への影響を考える」(於:神戸)</p> <p>特別研究委員会「阪神・淡路大震災による水環境への影響と対策」最終報告書発行</p>	<p>支部長 奥野年秀</p> <p>副支部長 山田 淳</p> <p>幹事長 古武家善成</p>

# 1998 年度関西支部役員名簿

名誉支部長：(故)岩井重久

顧問：合田 健 京都大学名誉教授  
渡辺 弘 元兵庫県立公害研究所所長

宇野源太 元大阪工業大学教授

名誉理事：河合 章 元近畿大学農学部教授  
北川睦夫 活性炭技術研究会  
駒井 豊 元大阪府立大学教授  
園 欣弥 元兵庫県立工業技術センター技術開発指導員  
日色和夫 神戸女子短期大学

川島 晋 大阪工業大学名誉教授  
北村弘行 (社)瀬戸内海環境保全協会  
佐谷戸安好 元摂南大学学長  
永井迪夫元(財)関西環境管理技術センター

支部長・理事：奥野年秀 兵庫県立公害研究所

副支部長・理事：山田 淳 立命館大学理工学部

理事：赤尾 満 大阪市立環境科学研究所  
井上頼輝 福井工業大学工学部  
岩島昭夫 京都府保健環境研究所  
海老瀬潜一 摂南大学工学部  
金子光美 摂南大学工学部  
城戸 亮 元和歌山県衛生公害研究センター  
菅原正孝 大阪産業大学工学部  
津野 洋 京都大学大学院工学研究科  
中島 淳 立命館大学理工学部  
中本雅雄 エヌエス環境株式会社大阪支店  
平田健正 和歌山大学システム工学部  
藤田正憲 大阪大学大学院工学研究科  
村岡浩爾 大阪大学大学院工学研究科  
森澤眞輔 京都大学大学院工学研究科  
山中芳夫 大阪学院大学経営科学部

市川 新 京都大学大学院工学研究科  
今井俊介 奈良県衛生研究所  
鶴川昌弘 大阪府立公衆衛生研究所  
小田國雄 大坂薫英女子短期大学  
川合真一郎 神戸学院大学人間科学部  
國松孝男 滋賀県立大学環境科学部  
宗宮 功 京都大学大学院工学研究科  
寺島 泰 京都大学大学院工学研究科  
中室克彦 摂南大学薬学部  
野村 潔 滋賀県立衛生環境センター  
福永 勲 大阪市立環境科学研究所  
松井三郎 京都大学大学院工学研究科  
盛岡 通 大阪大学大学院工学研究科  
矢野 洋 神戸市水道局水質試験所  
和田安彦 関西大学工学部

監 事：東 国茂 通産省工業技術院大阪工業研究所

犬島和夫(株)クボタ環境研究部

幹事長：古武家善成 兵庫県立公害研究所

幹 事：青木豊明 大阪府立大学工学部  
飯田 博 (財)関西環境管理技術センター  
池 道彦 大阪大学大学院工学研究科  
上野 仁 摂南大学薬学部  
大久保卓也 滋賀県琵琶湖研究所  
門口敬子 (財)関西環境管理技術センター  
紀本岳志 (株)環境理化学研究所  
坂本明弘 和歌山県衛生公害研究センター  
須戸 幹 滋賀県立大学環境科学部  
田中英樹 兵庫県立衛生研究所  
筒井剛毅 京都府保健環境研究所  
中島元生 (財)ひょうご環境創造協会環境科学技術部  
福島 実 大阪市立環境科学研究所  
森 一博 大阪大学大学院工学研究科  
山田春美 京都大学大学院工学研究科  
山本康次 大阪府立公衆衛生研究所

天野耕二 立命館大学理工学部  
井伊博行 和歌山大学システム工学部  
石川宗孝 大阪工業大学工学部  
海老瀬潜一 摂南大学工学部  
奥村為男 大阪府立公害監視センター  
貫上佳則 大阪市立大学工学部  
斎藤和夫 奈良県衛生研究所  
竺 文彦 竜谷大学理工学部  
高原信幸 神戸市環境保健研究所  
土永恒弥 大阪市立環境科学研究所  
中島 淳 立命館大学理工学部  
中野 武 兵庫県立公害研究所  
福永 勲 大阪市立環境科学研究所  
矢野 洋 神戸市水道局水質試験所  
山村 優 寝屋川南部広域下水道組合  
米田 稔 京都大学大学院工学研究科

## 関西支部第2回研究発表会の開催報告

海老瀬 潜一

1997年11月14日に京都市内で関西支部第2回研究発表会が開催されました。1996年11月に第1回研究発表会が大阪府吹田市で開催されたことから、第2回は京都市でという話が先にあったようです。実態を十分把握しないまま実行責任者を引き受けてしまい、前回責任者の石川宗孝先生や石井義裕先生に手順を教えていただいていたよう動きだしたような状況でした。会場を京都市内在住の山田春美先生に会場費の安さと交通の便利さから探していただき、まずはひと安心でした。期日は実行委員としてご協力くださった先生方の参加学会等と重ならないように計画しましたが、同じ京都で開催された地球環境関係の催しと重なるという少し残念な結果となりました。しかし、150名を上回る人たちの参加が得られてほっとした次第です。これは、「ダイオキシン」というトピックが特別講演と関連発表5件に企画されていたことによるものと感謝しております。

もうひとつの問題は、発表件数の確保でした。始めはヒヤヒヤものでしたが、実行委員の先生方があちこちに声をかけて下さった結果、締切一週間後に何とかプログラムを確定することができました。関西支部の研究ポテンシャルの高さと研究者層の厚さの実態を再確認できた次第です。とくに、中四国支部から3件の発表をいただき、うれしい結果となりました。今年から来年にかけて、学会本部主催の研究シンポジウムや全国大会を関西で開催する関係で次回はずっと先になりますが、第3回研究発表会が気の抜けた状態にならずに、さらに盛大に続けられるように気を配っておく必要があるように思います。会員諸子の協力でもって、研究で気をはくような元気潑刺状態でまた集いましょう。

(えびせ せんいち、摂南大学工学部)

## シンポジウム「阪神・淡路大震災による水環境への影響を考える」開催される

土永 恒彌

1995年1月17日、阪神間の諸都市を襲った未曾有の都市直下型大地震は、高度に発達した都市のライフラインシステムに大きな打撃を与え、多数の死傷者と家屋の倒壊で苦しむ被災者の日常生活を一層困難にしたことはご記憶のことと思います。水環境学会は村岡浩爾関西支部長(当時)を委員長に、関西支部の会員を中心に特別研究委員会「阪神・淡路大震災による水環境への影響と対策」を発足させ、2年間にわたり水資源、水利用、水処理、水測定の各分科会で研究活動を行ってきました。成果は第30、31回年回において発表し、97年に最終報告書を作成しました。この成果を広く市民に普及するために科研費の補助を得てシンポジウム「阪神・淡路大震災による水環境への影響を考える」を本年2月7日に神戸新聞松方ホールで開催しました。シンポジウムは村岡研究委員会委員長の基調報告とパネルディスカッション、参加者を交えた討論を行いました。各パネリストからは以下の内容の報告が行われました。

1. 阪神・淡路大震災による水環境への影響と対策(飲料水の確保): 真柄泰基 北海道大学教授
2. 震災時の水環境とくらしを考える: 盛岡 通 大阪大学教授
3. 阪神・淡路大震災の水環境への衛生的影響: 佐藤茂秋 神戸大学教授
4. 水・人間・安全・環境: 宮本豊子 兵庫県生活科学研究所所長
5. 市民として水環境について考えたこと: 伊藤潤子 生活協同組合コープこうべ理事
6. 自立分散型都市へ水循環の再生: 松本 誠 神戸新聞情報科学研究所調査部長
7. 阪神・淡路大震災と水環境: 村岡浩爾 大阪大学教授。

シンポジウム資料集入手ご希望の方は支部幹事長までご連絡下さい。

(つちながつねや、大阪市立環境科学研究所)



# 琵琶湖博物館・B i Y oセンター見学会報告

大久保 卓也

滋賀県立琵琶湖博物館とB i Y oセンターの見学会を関西支部主催で平成9年10月3日(金)に開催した。参加者は42名で、近隣府県の環境関係試験研究機関、下水道関係機関、水処理メーカー、環境コンサルタントなどからの参加者が多かった。参加者の中には関東や九州から来られた方もいた。

最初に、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構のB i Y oセンターを見学した。この施設は草津市の葉山川河口にある屋外実験施設で、水生植物や土壌を利用した水質浄化施設や太陽エネルギーを利用した水質浄化施設など様々なタイプの新しい水質浄化実験施設があり、さながら自然の能力を生かした水質浄化法のテーマパ

ークのようなところであった。興味深い実験施設が多くあったが、実験結果についてはまだ公表できないということで少々残念であった。次に、琵琶湖博物館を見学した。琵琶湖博物館は平成8年10月に開館し、その後10カ月で来館者が100万人を上回るという盛況ぶりとのことであった。水環境に関わる展示が多く、一度では十分に見切れないという意見が多かった。淀川、琵琶湖に関わる研究をするのであれば必ず一度は行っておきたい施設であると感じた。博物館の中央ホールからみる夕日もまた格別であった。

(おおくぼ たくや、滋賀県琵琶湖研究所)

## Water Quality International 1998 (19th Biennial Conference of the IAWQ) に参加して

市木 敦之

アルゼンチンに惜敗した日本イレブンが、クロアチアやジャマイカと死闘を演じている頃、フランス・ワールドカップとは全く別の国際舞台を経験してきた。Water Quality International 1998 (以下WQ I) は、1998年6月21日~26日にカナダ・バンクーバーにて開催された。周知の通り、2年毎に開催される本会議は、今回で19回目を迎える水環境分野最大の国際会議である。WQ Iでは、口頭発表413件とポスター発表575件が、30を超えるセッションでそれぞれ行われた。加えて、Practical Application SessionやSocial Event、Optional Tourなどが催されて、参加者の総数は千名を大きく超えていたようである。こうした規模の大きな国際会議へまともに出席するのは、今回が初体験の筆者にとって、我が国からの参加も大勢あったことは心強い限りであった。筆者は、主にEnvironmental ImpactsやUrban Storm Drainage、Diffuse Source Pollutionといったセッションに参加していたが、会議全体としては、こうした水環境や汚濁負荷といったテーマより

も、むしろ処理や浄化に関わる研究報告の方が圧倒的に多かった。

本会議が8年前に京都で催された時には、当時大学院生で、スライド操作などのお手伝いをしながらも、会議の盛況ぶりに驚いていたものであったが、今WQ Iもそれに劣らず成功裡に終えられたことは間違いのない。ただ、筆者の関わるセッションでの印象は、8年前に予見されていた水理・水文現象と水質現象との統合といった議論までに、今なお遠い道のりが感じられるものであり、自身の不徳も含めて顧みることがたいへん多かったように思われる。初めての大きな大会で結果を残すというよりは、多くの課題の方が浮き彫りになったのは、日本サッカー界だけの話ではない。

次回WQ Iは、西暦2000年にパリにて開催とのこと。多くの皆さんに、日本イレブンの忘れ物を取りに行かれることをお勧めする次第である。

(いちき あつし、立命館大学理工学部)



「まあ実際にやる人はあとで決めるから叩き台のつもりでアイデオだけども、アイデオという常套句に引かたり、気がついてから北米ロッキーマウンテン型で重いトラックを走らせるコンピュターを動かす。編集作業に追われ夏を迎えてしまわれ夏を標高4千mをいれ流る山々に育まれた清流を眺めつつ、遠く「関西の水環境」に思いをはせることができたのもインターネットのおかげなのかもしれない。この恩恵でどうか。この夏の猛暑で消耗された皆様どうぞご自愛を。」

編集後記